



重修真書太閤記
七編
十

13
459
70



459
70

福

重修典書太閤記七編卷之廿八

龜田小三郎孝心の事

并龜田老母貞義の事

龜田小三郎直純こさぶろう ちかひらへ小左衛門尉直春こさぶろう ちかはるの子なり直春
らむめへ小身ありひるぐ度々の軍功ありて加
増あり今へ大身とあり物頭の列たり直純の妹
一人あり是へ直純継母の所生あり能登國七尾
の前田又左衛門利家の長臣篠村志摩家親が妻を
り直純継母の事て孝心ありてく継母ゆまへ直純を
愛しむと實子と同然る上方勢越中國より亂入

同攻
會印

一松倉魚津の間へ攻寄ると聞えり。上叔方も
ても夫々援兵と差出さんとて諸物頭諸侍を撰む
とける。小三郎も其列に加はりて敵地の
容子と内々聞合ると大將の柴田修理進勝家加
勢より佐々内藏助成政前田又左衛門尉利家ありと
を沙汰しける。小三郎是と聞前田又左衛門尉出陣
とるといふ。篠村志摩も必定供とる。あつて篠
村の我妹の婿なり。然も妹の継母の實子我と秘藏
とる。母の心あつてよつげくあゆむ。妹の實
子あり。嗚り。うらむ。あつてらん。但戰場の習ひ
父子兄弟も敵味方と争ひていことこも容赦とく

く。保元のむ。左馬頭義朝の父為義と始弟
とも多く切たり。例もわり承久の合戦。佐々木
四郎左衛門尉信綱の兄の山城守廣綱を斬骨肉の
兄弟と妹婿とい等。く。是と討とも誰りのわ
り。このつよべ。とされとも我妹の継母の愛子ふ
り。その妻あれ。志摩とも憎いと云へ。さういふ
と。な。我も増りて覺とる。め。それ。何どの戰場
も。志摩と逢とら。逃べ。さ。ゆ。我志摩と討た。ゆ
べ。妹が歎。母の哀。あ。ひ。ゆ。ま。の。あ。ら。ゆ。
我。又。志摩。討。と。あ。べ。継母。誰。養。らん。と。何。と。し。
ても弓矢取の踏迷ある。縁者の。く。如何。を。んと

暫時思案よくれけり急度思出しのづとて
も越中へ出陣をぬらと第一の義ありと決著し病
と稱し籠居しけし越中出陣の勢揃もろづと
たり母へり移てより我子の武功をあめよ付越
中國より上方勢と合戦をば花をふかき軍しを
上牧家の侍の心の剛ある證を顯せよと心よ念
居たりける我子の病と稱し引籠る他の人々
へ上方武士と手合し不識院殿の習練ありし武
功の初と見知ををゆとゆなる我子の病の
何あるとみよ左の事の事も見え何故引籠
りやと様々思ひこころと思ひ得ぬが日頃親

と醫者の許に至り案内しと對面し我子の病と裏
問し醫者の不審し何左様の宣ふやうん小三郎
殿の御勞更存申さば承られ近日越中へ御出
陣と然あらんよの兎や角と云へと初どの事か
らト夫は母御の御談愚老が心よ落不申といれ
て継母もさういふを初越中陣へ罷
出ると聞てべり如何ある事や此四五日引
籠りて人よも會ひありて魚津加勢の勢揃も漏
てし知をあふ如く小童といあさぬ中日頃いこと
て隔あく打ちさらふていづ心底の隈もあく
あひ交しとゆよ此日近の病と稱て對面もせは

さそそその病を問てこもこもこまこま答もどは朝
夕の飲食のめのも氣を付て容子知んと思へ共物ケ
臭いと云たてて側仕と寄つひば如何も塞ご強
しとやうそれと合せて時々弓のどびこの音た
えび爪ある箭の聲のそあまうのこま案ど過し其
處よりあうば知れぬと態々尋し甲斐もあ
しと打うこもこもて其醫生が思ひあへりしこのひ
どと取れりし取ぬ人の負あうと捨てさめもの
弓矢のうけりしとまむく口號ひしこの五七日以
前ではあり此歌の薬師寺次郎左衛門尉公義が遁
世する時よふと一歌のうめりし心よ叶しぬ事あ

うて世と捨んと荒増うと説て継母の仰天一何
とて左様と思ひ立ちらめあう胸のこやと絶入むら
る路と杖と助けりしとやうて我家へ立戻り熟お
のひめらうひし是と能登の篠村がことと思ひの
末とれの篠村越中へ打出い互に敵とありつる身
の命の塵とたのそねば万一條村味方の為と討と
ゆとん妹婿のこやのれバ小童が歎とたのひゆり
此戰場へ出ざるなめいりゆりとんと案ど居け
る處へ能登り飛脚の來りけし何事なるゆと
呼入て聞へ立支持とこりあれと披けバ篠村事榮
田勝家の加勢とて主の前田と共に出陣とてく

大月言十巻第九ノ

四

然者戰場にて面會とも他人と同様とこしも
 縁の色見をト手柄の互の弓矢の運よりを可申
 いとの文休やう継母の心くと聞らるも竊し七尾
 へ旅立て篠村よ面會し此年頃の疎遠をり合
 彼の如何も是は何と問つ答つ程とこそ叔此度の
 越中陣前田殿も柴田殿の加勢として出馬あり
 との噂あり誠ありやと問ひし篠村答て申様の
 うも今度前田殿柴田と援けて出陣あるべしと
 織田殿の御下知りし前田殿の某は先鋒を仰付ら
 せしと世も噂とあるあらん小三郎殿も是
 度の松倉魚津へ出陣あるべし然らば肩衣袴の縁

者ありみ引替り鏡兜の敵と是も侍の上の事鳴
 呼味木あ母御前と落る涙を袖に押えをむける
 顔の眼へ赤め思ひはめて居る母は篠村
 小向ひ吾子の心も趣へ理をこし透間あり
 それに付て此老嫗が願ひあり外も非を吾子の
 妻と暫時ぐると預けあやとりへ篠村打ちか
 づさ何事も妻を預け参らるべし但今互に敵
 あり敵あり敵へ預け置へる理あり然に妻を去ぬ
 へし母御たしう同道あはれ心の内へ二世の
 妻世の中静まりひひあはれ忽むく階老契をこ
 しものたるまよし若し某とこそあはれ尼ともなり

後世とも問命終のその後一蓮の半座を分
 めるに改めて呼びつらん障のなと篠村が
 思ひ切たる言葉と母の涙と押えて伏せり小三
 郎が此節の病の妹を越後へ送りあはれ平
 愈とんと疑ひあし嬉しゆふ篠村殿吾子の情一
 りて三方四方あざゆり玉よ仕ふる道もたれ
 母継子の義理もたつてとけあゆと泣くも娘
 う辛と取打連て七尾と出て石動や名湖の浦と
 過行の氷見の伏木の大渡放生の津と舩出して黒
 部の川とさうのりり越海らる詠めつて辛苦とる

子と親しらば母のなげさや子しる道をと
 やめて駒の我が家とさして夕月夜黄昏ころよ
 帰入る

七尾より二宮へ二里二宮より石動山へ五十八
 町石動山より高岡へ四里八町高岡より小松へ
 二里廿五丁小松より富山へ二里廿五丁富山よ
 り滑川へ四里滑川より魚津へ二里魚津より櫻
 井分三日市へ二里櫻井より入善へ一里廿七丁
 入善より泊へ二里三十丁泊より春日山へ廿五
 里余合まで五十里廿九丁余のり
 継母の小三郎よ向ひ能登の篠村り許より妹と離

大司巳二編卷十八

別一返一たり女ハ夫ニ從ふものなれば敵同士
やるととも夫とハ何ともいふべさや情あか篠村
り心やうさ人ノ交ひゆと継母ハあけらる沈
る川誠ニ余議あり見えあは小三郎ニ斯と告
るニ亀田も大ニ怒りつ我所勞あとい越中陣と
断申て逃し共其儀あり只今より出陣し篠
村ニ面會し私事といひひらぐらあとい前ノ恨
とのへ母り意と休めんと直ニ出陣したりとあ
り

滝川一益三國峠合戦の事
并上杉勢横鎗勝利の事

織田殿菜田勝家ニ越後と取しめんが為めの越中
國へ亂入し松倉魚津の両城を責さをらるるに
う菜田加勢のこめ上州既橋城に任し關東管領の
權と許さし滝川左近將監一益より上野信濃越
後三國の塊ある三國峠へ打出しめあは滝川とあ
こち既橋より赤城山と打越溝呂木南雲の原より
片品川と打ちこり沼田より一夜逗留し又利根川を
渡り猿ヶ京に陣を居とハ先陣ハ三國峠をあえて
淺貝より着しけり上杉方にも兼てあり思ひ設けし
こなれば越後清水の城主栗生美濃守枕瀧の城主
栗林肥前守松本左馬助高橋修理亮其勢三千餘騎

して打出地の理を考へ要害堅固に陣を張滝川左
 近將監へ元來甲賀侍ふとハ忍の術と得たりし
 ハ只一人上枚方の陣々を見渡しさて本陣へ引返
 しあるゆと謙信の弓箭の作法正しとて今於て
 存生の日と同じ名將あるう然も此陣を
 取しつと合て居もその詮ありつと一責を
 めて見むゆとおのひびき先手分をとりたり
 けり先陣ハ鷓殿齋宮助松坂長左衛門宮地左内と
 の勢千餘騎二陣ハ滝川儀大夫と大将とて白
 子六右衛門と檢使と三陣ハ益の旗本より左
 への關大藏丞右への蟹坂助大夫青地頼母と備え

こそ上枚勢の長蛇雁行鶴翼の堅陣を只一舉に打
 破らんと押寄たり上枚方ハ地の理をとりて
 立堅めたる陣なれば少しも恐る色もなく双方
 関を合せしうハ大山もあれが為ふ動揺天地も
 忽震動するゆとあひたぐり足輕の鉄炮を
 射違ふるゆとあか畑の下より鎗を取て高橋修理亮
 一番あるを後論とるか心の剛あるものハ我
 小續けと喚りし龍川方の鷓殿を目入りけ突め
 める鷓殿ハ鉄炮の者と闘うをて然のちと思ひ
 一處の處を以の外は狼狽し持たる采配投として
 太刀抜うごし渡り合ふ是を軍の始と龍川勢と

上取方入るゝ戦ふさり然と高橋修理亮
の古兵の剛の者鎗を取て北國一とよびせり
滝川勢矢庭に五七人突伏らば鶴殿も終に戦ひま
け本陣さして引退く滝川儀大夫これを見て以の
外は怒りてまうさたあさ味方の若者ども軍の場
み出ぬのめら命をたぐふ事ゆある我を見捨て返
りての大將軍よどの顔よ逢んといひる繼げぬ
めの共と大音揚て下知これハ宮地松坂引く
高橋一人を取巻さり高橋くくともるこり
くくくと打笑ひあふさるの滝川勢や我等一
人と討んとての結構の嗚呼我あうう手柄のめ

よ同じの宮地殿よ首をハ参りせん此方へ御入
あるうとれへ参りゆらんうと云言の葉のをらる
ぬうちの鶴殿と戦ふる十文字の二尺計の鎗お
つ取宮地を左手よ近付て只一鎗よ馳向ふ宮地
ハ太刀と拵持て高橋を切て落さんと追廻る高橋
宮地を左へ迎へ突て馬を躍らるの馬を飛して
鎗とひねり二追三追追たりう何とりけん宮
地馬より直逆よとると落おつてハ高橋のとうけ
る鎗取直し能々見て宮地との御首と賜らる
くひうよたり如何とへ落たる人と突たるハ寝
首うとれと人ゆらん静うよ起上りゆへり尋

常ノ軍とべしと聲くく宮地忽をさ上り敵か
 のも高橋殿あまうみ殊勝の御振舞御首賜とる
 も勿体なく又高橋殿の御首あると賜らると宮地
 どの手及む今日めとや黄昏なり明日ふ
 そ見参仕らめと馬よ打のり味方の陣より入り
 高橋宮地を打めし我本陣へ引くへを松本左
 馬助滝川が陣の前より上州勢へ何の為に出陣
 ありし上州勢の軍を待付て軍をさむめと
 存し上州勢の軍を待付て軍をさむめと
 出合あへと呼られ滝川勢馬の頭と立直上州
 勢より向ふ是と初は龍川勢又めり返して戦ふ

を上州勢の陣法より進放待りつる彼謙信以来習練と鳥雲
 の陣法より進放待りつる彼謙信以来習練と鳥雲
 さよの帝釋修羅の戦ひも是よの過しと夥し龍川
 勢の案内知ぬ他國の軍より日暮めくる山陰の
 樹立小暗坂道の岩根を傳ひ戦へ次第くよ
 引支度進んで鎧を合をれ味方其間操返し
 進退さるる見えける處へ粟生美濃守宇佐美兵
 左衛門横合よりあめい掛し龍川勢立足と
 ろも崩さるる谷へ落ちてい命と失ひ川に沈て身と
 果は松坂長左衛門踏とる上州武士のその中
 よ松坂長左衛門重宗より誰もあは近寄て太刀

の切味試あつて面もあつて進くる宇佐美兵
左衛門見るつと掛寄ていふ松坂殿宇佐美
と見忘れぬひひ一鐘参りふとのふうとみよへ
長左衛門眉間つられて馬とう落あつると其儘息
絶たり是と軍の始つて又入ると戦へど滝川勢
の上枚方の横鎧よ不意とうとて隊伍も定まら
ぬ其上よ松坂討とて先鋒の士卒大よ氣と落
右往左往よ散亂後陣の左へはがとて儀太
夫齋宮大よ怒り味方とてけよを共上枚方栗生美
濃守車よ馴たる勇士の透間わると責付け
るふり滝川終よ打負けり一益初度の軍よ負

と如何もも残念なり重なる能々用意して戦ひ
ゆへと諸物頭よ下知りけとハ關大藏奇計を思ひ
付たりやうの士卒の腰よ竹筒付るをその内よ煮た
る大豆と入置一度戦ひて引足よその豆を道よみ
りて置るべ上枚方の馬共豆を喰んとすむあ
らん其處へ取て返して打破るべと謀りけりよ
何も此義然るべと評義一決なりたりけるよ一
益是を聞てあの義誠よとるべと但敵ハ聞る
謙信の練熟したる侍多し上方の侍どもとあつら
ふ様よ大様よたのふべと云しと云しとハ關大藏
などゆ龍様よ上枚勢や悉とさるをあふよと氣色

と替て問ふまじ一益のやと上枚勢を恐るるま
 の非び軍事の密あるを以て貴しと謀めり時
 へ行ひてと坐を立しうべ大藏のゆくと立一
 益に従て閑處に至る一益大藏と云ふは上枚
 謙信の軍法あり一間二地三士と云ふあり一間と
 の敵地を間ふと第一と云ふれば此龍川が陣中
 も上枚方のもの凡三四十人あり其三四十
 人のものを悉く捕へ盡とべけんや上方よとの間
 とくづらよ三四人入るまより終捕へ盡されて間
 用とくくあり上枚の間は木あり木の間あり石
 あり石の間ひあり一益されば三國と越てあり更

よ軍議をいふるは此処よといひよあり大藏
 も舌と振ふて恐しげり一益うらむを申様爰も
 定めて間のもの有あるへ二地との地理を能
 知となり夫の平日の心掛も中々以て一朝一夕
 のことよあり其地よ悉く間あり去りて他國の
 人うへ入るも國境を入り早夫々へ注進し處々よ
 用心を是謙信の作法と云ふ然る春日山の奉行の手
 よて調ふは他國のの何百人のつらくよ居と云
 と明白よ知てあり三まよ養ふ作法はつたよ
 後一國長さ百里よ餘とるを只一城の内とす一村一
 御侍を分て仕付て住居とて萬事と土地よと賄ふ

士とて衣食たり中間小者いどぐ我屋敷の内の者多し
 是ごろの時よ逃もとびと煮て聞し露たがく我猿京
 陣とて夜あゆの旅の者ともう三人三人引とふとい群とあ
 通うらべ三國を越てのち此通筋の往來の人数多く減たり
 然先は多うくいとど間の者と知とて滝川勢い
 誰々を兵糧玉薬いり計小荷駄いり云とて總て上枚方
 知とていん夫引此方と上枚方の大将誰々防く切處
 どころと云と更に知とて我軍略の足ぬ処とたのみと龍川
 う云とて少も違はれ越後方とて種々敵を計りと油断
 く心一川よ工夫を凝し明日の軍を待とるけり
 重修真書太閤記七編卷之二十八終

重修真書太閤記七編卷之二拾九

龍川勢敵と謀て却て敗軍の事

并栗林肥前守猿が京放火の事

上枚勢へ上よ備へ龍川が陣ハ地低なるが故よ何
 も戦難義いりいりよもして上枚勢を廣場よ引出
 し勢の多少と謀りて引包一人も漏さば打取ん
 と一益軍議一決し足輕五十騎ごうりよと上枚勢
 よ向ひ鉄炮を討とていりよと上枚方よと兼て瀧
 川が謀をさるり知たる上はれべ更よ取合ふとふ
 く見ぬよよと居たりけり是ハ低さ處より高と

よ向て打玉の多し越玉より偶れど
 りく打の地中へ打入て用立比加之上扱方とて
 瀧川が軍畧を探り知つる事なるは鉄炮を打ち
 けりし挑むとも是より掛合んとせざるは
 り滝川方りての思ふ程敵と四とあるやとこそ
 更へ方便を替て戦つゆとて關大藏丞青地頼母と
 先鋒と其次瀧川左近將監一益近習手廻り二
 千五百餘騎前後二隊より引つり昨日の如く足輕
 一鉄炮を打ちけりしを上扱方と尾引けりしとも上扱
 勢の静まりめつゝ音もをばたぐ絶々鉄炮と
 つるべとありしとて寄手と更へ這虫とも

おのゝね様よりは滝川勢安りし思
 ひ本陣より儀大夫一人と残り置宮地宮内鶏殿齋
 宮蟹坂助大夫と三方へ伏置青地頼母真先より進
 て関を作とば上扱方とて同く関を合を鉄炮
 と打出し栗林肥前守鉄炮足輕と左右より配り大山
 の崩る如く上より下へまがり落しけりしは
 て期したるこあり瀧川勢肝を消蜘蛛の子を散
 りしとて逃たりけりし青地頼母大音あけ北る味
 方の逃様やとてとあつて戦つゆと下知りし
 例の竹筒を落しけりしは豆の大地へあがまておび
 たし然れども萌立しる勢なるは一支も支得

二陣の勢も逃入て息繼居たり瀧川左近將監是
をみて青地が勢をの後に廻し我手の勢を雁行し
進め栗林と眼より切てめぐる上扱方より宇
佐美兵左衛門松本左馬助瀧川う勢も駈向て鎗を
入る栗林肥前守の世も許されたる勇士より然も
思慮ふらふものなり馬も口籠を掛て乗たり
けり然ハ大地も豆の散亂しつども馬のあれを
見留もをば獅子の兒の荒るる如く駈ちつて
るより關り計行られ肥前守の手のめの勝を
て能軍しつども瀧川勢散々し切あされ本陣さ
て引退く肥前守の猶も敵と追掛し勢猛し振舞け

る處へ蟹坂助大夫宮地宮内鷓殿齋宮三方より切
めり一人も餘さずと揉合たり肥前守少しも驚
うとめくあるべしと兼て知たる事として左も當
り右と駈前後も向て戦ふ有様阿修羅王の荒るる
姿もめくゆらんあな花々の武者振や北國一と
は是といとんので打取て高名よとんと命とりさ
り突合たりされども肥前守の大力より勢高く
馬も聞ふる名馬より多く敵と踏倒しあつて蟹坂
宮地鷓殿と初めめてあぐんで見たりけりめ
める處へ宇佐美兵左衛門栗林も入替らんと進
來り餘り強く戦ひけるより鎗と突折しつて

腰に鎌と抜き出で、鎌を投てぞりけり。龍川
 方蟹坂助大夫宇佐美殿と見し、癖目り其鎌申請
 いひしゆと云ひ、馬と走寄、大太刀うごし、打て
 のる宇佐美のめくと見ゆりも、悪く蟹坂り言
 條りか其處を退ると云ふ、鎌を以て蟹坂が太
 刀と巻んと働く處へ宮地左内り、來り宇佐美
 り後より切てり、とて上扱方の兵士多く、掛隔て
 んと駈寄と宮地左内大ふ怒り、負ふも足ぬ、其方ど
 も取籠らるべし、左内ふあつ、と鎗を打り、突
 てすは、とて蟹坂、宇佐美、只二人、火水ふ、つて戦ひ
 ける、宇佐美、鎌の玉飛で、助大夫、左の肩とん

つと打つて、蟹坂りか、と馬と返して、逃
 出と、宇佐美、早業、力み、任を鎌、引寄、一鞭、あ
 目と、助大夫、馬より下へ、と、と、落宮地、へ、士卒と
 追り、兵左衛門、み、打り、兵左衛門、の、宮地、り
 鎗と、引つけ、曳、め、と、引合、り、終、鎗を、捻折、て、左
 右へ、つと、別と、けり、龍川、左近將監、へ、上扱、勢の、後
 へ、廻らんと、して、た、松本、左馬助、み、面を、合
 を、松本、り、龍川、と、知人、の、松本、殿、一
 殿、とい、を、も、り、左近將監、久、の、松本、殿、一
 鎗、参ると、突、けり、何、と、り、松本、の、前
 輪、突、た、と、抜、ん、と、り、隙、み、左馬助、右、手

へゆつと飛て下瀧川馬の足と薙く馬
 屏風と倒さる如く倒さば滝川も下立て味方の陣
 へ紛れ入されども龍川方の大勢あり上秋勢の疲
 とさり中取籠一人もあまさらば打取と下知した
 る聲と間栗林肥前守ののともをば四角八面切
 て廻さば龍川勢持あましく見へたりけり肥前守
 猛虎の風に向ひ飛龍の雲も遊ぶ如く最長閑
 のてあをとも大力のこたれ討もほしく切も烈
 しく忽と滝川勢二三十人切倒され息も絶々
 うのる處へ栗生美濃守光貞高橋修理亮俊光千
 餘騎も栗林跡へ廻り南の手より関をどつと

を揚たりけり龍川勢へ栗林一人切立らる既
 崩と立んとやける處へ思ひも寄る南の手より
 魚鱗めりり荒手の千餘騎面もあは突立て
 たりしうべさしも猛と龍川勢物出萌と萌と立
 夫本陣居て軍いいうと案居たりし味方
 敗軍と聞しり自身真先乗出さんと
 時あめひも寄ぬ後なる峯より峽へうけ大旗小旗
 数十流松の嵐吹あひうを龍川本陣へ向て押
 寄んと儀大夫是とみて誰よもあはるを見て参
 とと下知されば承るうひをて使番の武士乗出

直引返一旗の紋へ上抄方の侍なり勢の如どの
 何許うあるべしあふあひた〜あの峯のとなら
 右の峯より山續と幾十万と云と〜らばあの
 勢も本陣と取とて難義ありとて儀大夫の出も
 中らば使番めて先手へ此由注進を〜左近
 将監も大に驚とま本陣へ引返大将既引取と
 見へ〜この手の軍へさて敗と〜是は高橋
 修理亮一時の謀略は滝川方より白子六郎左
 衛門手勢と引率して進とけるも上抄方加治卿大
 夫万願寺主計が上より落〜敗らとて是
 非なく後陣へ逃て入日既黄昏よ及び〜うは両

陣互引分と入馬の息と休めけり今日の軍も滝
 川手も千二百七十余人討と〜上抄方も七百
 三十余人〜然と栗林肥前守の敵も圍
 と危と目見〜栗生美濃守と救と〜と面目あ
 くの思ひけん手勢と率〜三更の頃あのびゆら
 敵陣近く押寄用意の松明を投入〜焼立て関を作
 うらけ畑の下より切て入滝川勢への外も狼狽
 さ〜本陣さ〜逃たりけり栗林肥前守ハ士率
 と勧めと〜と火筋と射と松明をさ〜と
 めと〜掛並べ〜瀧川が陣處幾棟と〜焼亡に
 滝川左近将監一益の栗林も本陣を焼立ら〜口惜

大隆記七續卷七

五

陣と取
いづらうとん方なり猿が京と三里退る月夜野邊

上枚景勝魚津大斥侯の事

并倉田名山感状の事

上枚景勝魚津宮崎の注進を聞しより直に出陣あ

るべめりしは俄に風邪ありされ四五日延引あ

しむひしうども等閑ありて非どとて天正

十年五月十日越中國新川郡天神山へ着陣あり

天神山の魚津の東南あり大岩寺日照山と号

し本尊不動境内に窟あり靈驗新なりと云り

織田方より前田又左衛門尉利家諸将へ申ける

の小敵とてあかどるべりし大敵とて恐るるを
めどとの孫呉の要領なり只今織田殿の大國あま
た領しあかて天下誰人うその下知を背くべきた
とく一旦いそしむとも終りの帰伏して味方よ參
どべし上枚景勝らうらよ越後一國を領しなうら
織田殿の御下知に背さる事謙信以來の武道を傳
えし故と知し謙信ありてるがうらよ五年の
間なり謙信の引廻したる侍ども栗林肥前栗生美
濃直江山城河田豊前あどのつともく世に知し
のの共なりそれ等う十死一生とおのひ切たるは
由々敷大事あるべし殊に越後武士の馬強くして

乗上手なり必先陣馬と撰んでうけんとして
此方よてもあれと防く用心とひく待あふべし
それいまづ面々の陣の前み逆茂木あひく引との
奥ふ柵をありて馬の足ととむひづくひといこれ
しうい何も尤なりと同意して持場くみ逆茂木引
それより引下りて柵と二重三重入付のうも用
心堅固より引下りてけり同十五日上松景勝勝とさる
兵士五十騎足輕五十人むりりと召連金の日の丸
の四本旗とさるを織田方の陣處迄くの山の端迄
大斥候のさめとて打出らとさる柴田陣あり佐
久間玄蕃と始めのづとむく逸雄の若武者なれば

景勝の肝あらく近々と打出しこの顔悪さよのて
打寄て只一打み打取んとひくめさひると勝家聞
て堅く制して申ひるの上松景勝あの小勢よと打
出して何さま子細あるへ一輕のりさ動して物
笑の種とならんも口惜し今暫見定めて後りても
遅めしと厳し是と止めひるあり陣々忽静
りて木戸と固め備と定め居りける景勝の柴
田が陣處と委し見積りその上山上へ押上り猶
陣中の体と見定め倉田左五郎松本外記名山太郎
兵衛三人矢文射よとて出されし倉田松本名山
三人の敵陣さして乗出ひる此者共の引上口と

心許りしゆれぬれけん旗本の勢と二十騎をり
引分てりの三人跡に付てを馳をけり彼三人の
佐々内藏助が陣の前六七十間も乗付て矢文の箭
と抜出し汚まわりて切てをる其箭のつとも佐
佐が陣の柵門の左右の柱に立たりけり其箭文の
詞の景勝父祖の代より越後國の守護として海岸
の防禦國中の警固怠慢あり申付て織田殿の尾
刈御坐の其間數ヶ國と隔ていへば同敷拍原の
山陵の御裔の平氏より親屬の間なるうら申通
このやう又互に根と遺を由もなき然るも景勝
う領し魚津の城近く御人数を出さしといと承

り景勝何事の御不審のゆと存罷向ていへば御勢
共の營の前より逆茂木引と柵を結し事偏り向ひ
城の如く見受ては然者景勝と御一戦の義より
やうん景勝と織田殿と弓矢及びひの意趣更ふ心
付不申といふれあうの佐々内藏助是と柴田が
陣より持行て勝家を見をれば勝家熟あれと讀畢り
いりあるも景勝の武運といひ弓矢の作法すて行届
さたる大將うら但矢文被射て返答をさるも臆し
たるふ似たりいさ返矢射ゆるんとて其箭文に申
越ゆる仰の如く織田と上杉と遺恨いなくいへ
とも信長計らと先祖入道相國の跡と興絶て久

敷右大臣の大将よ昇進しての弓矢の携くるるのと
ののの誰う大将の任と重んじざるべし又王土よ
住いめの孰う大臣の官よ従ふべし景勝数代
越後の守護よての國務よ付て四度の朝集使の王
政の先んごる處なるる景勝家督五年の間一度も
朝廷へ使を奉りてさう内裏造營以下朝家の御
大事幾度もひひつるよ一度も公役と参勤をばい
是等豈一國守護の身よ取て怠惰とゆいん等閑
とゆいん是外の小事の暫くさうとゆい此等
の事と正されんる為よ使者と差向てゆい當國
魚津の城と構へ軍兵と籠られゆい因て此方よも用

心のたぬ逆茂木引柵と結ての其方よて城を破却
甲冑と脱とて衣冠とて國務の怠漫と謝し申さ
とゆいんとよゆいん使者の面々も逆茂木引とて
柵門破り同く衣冠とて面會よ及ふとゆい尤も
無之ゆての信長とて大臣の大将たり兵馬の權
と專ふとる身ゆの景勝只今朝敵といふとゆい征
伐とての其官其任を等閑みとるよ當りゆ是全
私の事よゆいん返答たりけり然るよ倉田松
本兩人の堅固田舎生育よて文字の上よ疎けとバ
近々と佐々陣へ乗付て陣屋の容体と人もふ
けりと伺ひけり跡より續く旗本の二十餘騎も同

越後の國侍禮儀知はぬ敵陣の前とも云は鞭を
取てあの陣より此陣より幾町むらう此陣より
彼方の陣へ幾町むらうと心の儘に見つめると見
て佐々方陣の若めの共憎し越後の國人ども使ふ
立しと思ひつゝ是る陣處の町積り其儀あり
ば許し思ひ知ゆこと云ふも鉄炮三四十
挺つゞ放し放し共越後武士とこそ驚
く景氣よく心静し引返を然るも多くの玉のうら
倉田が馬の中りうら倉田鞍より餘さそを落
と得たりと上方武士木戸と開て打出ると見
倉田の起上り鎗と取て突合は名山松本一同小續

らそ鎗と合をり木戸より内へ追入り追出
む互に支えさう中りも松本外記の眞先と門
り内へ切て入佐々方即等井筒隼人あれと見て其
處を退そと云儘も四尺余りの大太刀抜て切て
めると外記の莞尔と打笑ひ鹿島の神の教も小男
の大太刀の七損三徳と云ものとは見あへぬと拜
打真向より肩先うけて八九寸切割と仰み倒して
息絶たり外記の首と取んとけり
刑部丞取とて只一打も松本り腰を切
拂ふ松本心の猛げと尻居るとと倒るは刑
部走めり首とめんとする處と名山太郎兵衛

大月己二編末ナシ

二

鎗取直一刑部う脇腹突通一突倒して首と取外記
り首と取添て味方の陣へ引返と兎角時刻うつ
とい直江山城守佐美民部少輔長尾伊賀守丸田
伊豆守大將の安否のうと十餘騎と打て出し
る此体と見るあり長尾伊賀守の手と佐口傳兵
衛宇佐美う手と生駒右馬亮百騎とらうと引率
て名山倉田と迎えんと馳出るとと名山倉田ハ
氣力と増佐々う勢ハ木戸より内へ引返一貫木さ
して音もと上扱勢ハ思のうと振舞て矢文を
首と取添つ大將の御前と出とい景勝とと機嫌
り二人と感状といとれと

女降詰七級者廿九

今度至越中斥侯之節織田方外構土手際ハ押詰
迫合之時於虎口前一番鏑合刺其仕様宜敷故終
得勝利の事悉皆其方有武功名譽之働難勝計候
仍而感状如件

天正十年五月十五日

景勝

倉田元五之丞と

又名山太郎兵衛とい
此度越中表ハ於て斥侯之節織田方陣取之外構
土手際ハ押詰迫合之刻不劣於松本外記門内江
押込高名殊と松本外記之首為敵不為討取之乘
敵之首取添取之武功之至神妙之車依之御感状

大関已二編卷ナシ

三

大開記七編卷之二十九

如件

天正十年五月十五日

直江山城守兼續 奉之

名山太郎兵衛殿

直江う組のしほなるべし柴田陣より矢文の返
事より景勝より仕掛ると待べし又此方より
御出馬と待べしと評定しつとも織田殿の
堅固より取あめを居
たりけり

重修真書太閤記七編卷之二十九終

重修真書太閤記七編卷之三拾

上杉景勝魚津表大合戦の事

并直江山城守兼續の事

天正十年五月廿五日上杉弾正大弼景勝八千の逞
兵と率ひ直江山城守兼續と先陣とし長尾伊賀守
宇佐美民部少輔と二の身とし左右に備へ景勝
ハ中軍より丸田伊豆守と後陣とし甘糟備後守と
天神山に残り置今日ハ織田勢と有無の一戦をん
と勇し勇として推寄たり織田方あても前田又左
衛門尉利家より移りて景勝の陣へ間者を入置しう

大開記七編卷之三拾

景勝出馬の次第と委細に注進したるにけるより
利家あれと勝家と告て陣々其用意をなしてけ
う然るに其日なつて音もせり利家大に面目と
失ひ間者遣をせし足輕と柴田が陣に連行たし
めは如斯と承らうつと云せしうども勝家らめ
成政勝豊おとよ本意を思ひけり其後柴田が手
らをも草刈ども多く出して天神山の容子と探
某山は打上り敵と眼下に見あらしと軍をへし先
鋒は誰々後陣は誰とんと最もたしうども聞しうら
草刈ども柴田よりくと注進は柴田聞て尤も有ん

と其手配と成るるども其日成て上杉更に出さ
とバ又空敷諸手と騒し斯有りのらの上杉方
へ入置し間者のいふと更に當りうら氣と緩し
間者と決し信用をば是は直江が謀りて他國と
のひ山の中より敵の間者もさそり多く入つ
んそんと防ぐに斯々と日と定めし日と延し備
と立てし操替の間者の詞と違をとりあり然も眞
の評定の人と知さぬ隠し詞會圖の日取と云とあ
う又逆干支の操様の物頭とありて定め置あとい
謙信以来の定法とや
逆干支と云とい子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥とくぞ

ふると頃と一亥戌酉申未午巳辰卯寅丑子と逆とし
 頃干支と寅日といふべしと逆干支とて酉日
 といふされば申の方より誰々と云くも實に卯方
 なる卯方といひしこの中より申方あることもあ
 り是謙信の定めし處と聞り
 柴田より召て上杉の軍立尋常なるべしと見積りしこ
 ころは佐久間玄蕃も城を責させ前田又左衛門尉
 佐々内藏助と左右も備へ勝家中軍も在て敵の變
 化と見定めさせ後軍をたの思ひけしとて結局静
 まり返りて扣り上杉方の先鋒直江山城守が手の
 者と號り六七十騎柴田が陣門に寄來りて申ける

織田殿大臣の大將も昇りかゝる朝廷の大
 政と助けむ景勝が越後の國務急りゆと正させ
 むふり故に御出馬ゆと承りゆ抑景勝が親よ
 ての輝虎の三度上京仕りて將軍家の御用と勤め
 朝廷の公事をも怠慢ならず奉りてゆ且輝虎を以て
 關東管領職も補せしむゆいしとて定めし知をむ
 ひつらん然ると當春輝虎が國よてゆ上野國と故
 もなす關國となす龍川左近とゆらんと關東管領
 とすゆいしつる由も輝虎將軍の御用朝家の公事
 一度も怠らばゆ然ると何の咎とて上野國と關國
 とありむゆいしゆ又輝虎が管領職と召放たれん

ふへ將軍の御教書あるべくい更ふ其沙汰すく
織田殿の私の御計ひと聞えの然ハ朝廷の大政
とのひあるひハ大臣の職務とのをせあふの總て
織田殿の御偽と覺えの只親の輝虎の遺跡と
も武田入道信玄の跡の如く打滅しあふんとこの結
構と知し朝廷より宣旨の御使よりいん直垂上
下の侍三四人より外記方の下司よりして事行
いづとよさそとてて数万の人数より甲曹を是追
御出いよと實は宣旨の御使ありと知ての輝虎
の跡より景勝討て越後國とも押領をさせあふん
この御企と隠とすくいへ不肖のうら景勝も謙

信が取立ての侍共引具して是より罷出ていと申
も終えぬと雨の如く鉄炮と打掛いあふり徳山
五兵衛柴田伊賀守物よりうえぬ性なれば面も振
び打て出得物と取て戦ひひるうち上松方彌勢
加ら踏込く打合ひると見て佐々内藏助諸手と
下知し早總めよりみ掛り上松勢と前後より引包
んで打ゆくと勇めしうむ上方勢何も木戸を開て
打て出関と揚てを馳向ふ直江山城守くくと見る
より諸物頭と差招と捨鞭打て引退くくゆる雄の
柴田徳山とこの軍の勝たるを進めくと下知の
川隊伍と亂して追掛たり上松方の二の備より直

江が引い何故其意と得ぬと眼前のめくる敵
と見のうと法やあると聲と合とて切結ぶ上方勢
此備やたよ打破ハ景勝の旗本よ旗本へ切入ハ
景勝と組で勝負とべしと逸りよとゆくと寄たり
けり勝家の老功の侍は直江が引い故あそ
あつめと其陣列を守りて居たりける長尾伊賀
守宇佐美民部少輔二人とも勝とたる勇士やれば
柴田伊賀守徳山と弓手馬手相近付とあめい
て切めける其勢恰も大山の崩るる如く射も
強く撃も烈しうけるも柴田徳山並足あど
ろも敗走ハ勝家のめくと見るも佐々内藏助と

呼取ていふ佐々殿直江へ心得を勝家長
尾宇佐美と追拂ひいへ御邊ハ直江を守りあへ
とあつりくく勝家馬と真先進て打て駈せハ長
尾伊賀守のあそ寄手の惣大将好む處と馬と走
ら一處よと見てあそハ勝家り乗る馬
の三頭と二太刀三太刀斬とて馬ハ狂ハ廻
る勝家怒てあつ廻り馬と切とハ狼狽てり人と切
やと云ましく四尺あまうの大太刀抜くご長尾
と目み掛拂ひ切かあつて傍なる松の立樹へ五
六寸むり切込さう伊賀守あれを見て人と切と
入馬と切北國武士の手の内よ合とて人と切と

大陪部七巻第三十

て松の樹さうり御太刀の勢へ格別なりと褒たり
 けり勝家ゆりく太刀拔取天晴御邊の頭の骨の
 うさうと大口あひく打笑ひ物別とまを成さうり
 宇佐美へ徳山と追つ返さうり百餘合戦ひける是
 も勝負付されば一息繼ぐやと右と左へ別とさうり
 其後勝家馬と乘直し景勝の旗本目よりけ切掛るを
 丸田伊豆守三百餘騎よて取圍漏さうりと責たりけ
 う勝家大勢よ取込らんと下りとも少しも氣と撓ま
 をひ前後左右よ切散し七轉八倒しと働さける處
 へ石黒主馬助進と來り勝家の馬の前よりけ塞り
 越前國の石黒よの御大将上殿見參をとんと呼

ろりく近付と景勝の後より佐口傳兵衛よ石黒
 殿と長刀打ち打ちてめくる石黒あれとみく下臈
 なるうもさならし石黒が太刀の切味よく覺え
 て炎魔の廳の訴よとと七十餘合を戦ふさうり傳
 兵衛と石黒り戦ひ果し付給本郷金七五尺二寸
 の太刀を拔持切めらる石黒とらさる片手討よ
 討ける太刀よ金七五尺の脇とさうり切とて尻
 居よ倒しけるら倒しけるら打拂太刀よ石黒も左
 右ひささうり倒しけるら倒しけるらも臈當るけ
 とべ疵付を立上りて戦ふと生駒右馬助のりさうり
 と切掛たり石黒生駒とらると白眼小悴めと云

ひのぐら真向只一打と打けるが切そん太刀取直
以その處へ長尾伊賀守馳來り石黒が右手の肩と
と切先下り切ける太刀石黒が馬の平頸ふ當り
馬の驚立上る石黒馬より真逆様ふ落けると生
駒の寄首と取丸田と勝家只二人一交もを以戦
ふれど丸田志らく受太刀ふりつゝ危ふく
見へ處に甘糟備後守丸田と助げく五百餘騎い
ゆいて掛とバ勝家も前後の敵を禦さるの軍頗難
儀なりけるを見て前田孫四郎利長勝家の左より
千餘騎を突つけたり勝家は力と得てまをく
進んで戦へば上方勢の本陣へ更は無勢しとて物

の用み立べこののへ無うけり直江山城守をへ能
時節なりめとと下知とる程に越後勢真一文字
み切りける佐々内藏助大仰天一自身鎧と取バ
郎等ありける蒲田主税うけ塞りて戦ふと上松方
より夏目宮内三尺七寸の太刀を渡り合佐々が
がより伊丹右京主税と助て戦ひけると夏目をこ
しも恐む右京腕と打落しやりて主税と切倒
一二の首と取て引返を佐々が兵士此に怖けつと
木戸より内へ引て入

佐久間玄蕃城責の事
并直江前田軍配の事 附 柴田染月毛の事

上杉景勝の旗本と柴田勝家と入替く戦ひ兩陣と
 も勝負區々なりとも直江山城守り謀ふ因
 て柴田の佐々内藏助敗走と一は景勝旗本と
 へ勝関と揚て勇とける魚津の城つゝ佐久間玄
 蕃只一手短兵急攻落さんと鉄炮を打掛く搦立
 けると見て前田又左衛門尉利家横筋違ふ人数と
 推出し佐久間と續つて攻掛る城中の吉江織部
 正河田豊前守竹股三河守亀田小三郎寺嶋六藏何
 も何も世も許されし勇將は些も騒ぐ氣色あく
 持場持口と固め鉄炮と合を大木大石と投出しつと
 して命を惜まば防と戦ひしうは流石の佐久間も

責めと攻口と引退る士卒も兵糧遣をえり
 休息したるける處へ前田孫四郎利長と來り佐
 佐内藏助直江山城守と戦ひ直江が為し打破ら
 木戸あり内へはむと入と告げるよる又左衛門
 利家へ佐久間と共二城と責ける佐々軍も負
 しと聞とそのまゝ城と打捨直江も向て戦ひと
 挑む城中もへ前田佐久間が勢の俄も責口と捨
 つること如何ある方便あるゆとあめひつと吉江
 織部正河田豊前守相ともも櫓のりて見渡を
 へ前田へ佐々を援けて引しなり佐久間が勢へ兵
 糧遣ひのづとも城責と疲しと見へ打緩いで休

息をとり竹股三河守寺鳴六藏とくと見齊一能時分
 ちりいで打出て追拂ひひとと三百餘騎城門
 と八文字の押開き馬の鼻と並べりけ出鐘先と
 揃へて佐久間が陣へ突くけり佐久間が勢の餘
 り強く城を責て士卒も侍も勞たり兵糧遣ひく
 腹帯緩め馬を秣めひ居たる処なり大入驚き周章
 いと鎗の長刀もと立さるく處へ寺鳴竹股あめ
 てもあつた真先も立て突合ひて佐久間が手の
 者云甲斐も突まけり二三町むらり引退く今
 追佐久間が居たる處へ忽ち竹股寺鳴の陣となり
 主客地と替戦ふらり玄蕃のめくと見るるも大

小怒りあへ口惜し此芝居と城方ののの取とて
 何の面目も世も立ん我も續けと云ふも好む處の
 大身の鎧三尺七寸の長鋒とて打振く寺鳴
 ぐ手へ突て入六七人突倒し血も染りたる鎗の柄
 と拭ひゆやうに戦ふらり佐久間の實も死者狂ひ
 敵と十方も見たり岩も負る猛虎の如く荒れあ
 して走廻る竹股三河守これと見てあくれ敵や我
 打取んと四尺餘りの太刀とて渡り合火花と散
 しく切合のどと竹股佐久間と欺き城門さして逃
 出せし佐久間へやとと追掛たり三河守へ取て
 返をめぐらる佐久間が真向真一文字も切付る佐

久間へ鎗と取直し三河守と突んと仕ける処は
 三河守は打太刀ふ鎗の益首切折とあそむる太刀と
 鞍の前輪と切付る刀の光りも馬驚と二人とも
 左右へつと飛違ふ危ふりける戦あり三河守
 へ手の物と思ひ佐久間と打漏し牙とめめ佐
 久間の我物と失ひつる面持と右と尤も白眼合
 ふ玄蕃へいふも城中へ付入んと城戸際へ
 寄種々も城兵と誘引と云とも城中も竹股寺
 鳴打出て勝利と得しと手柄とく再度打出んと
 もとごりうべ玄蕃とさうも氣とめと日毎く大
 手へ寄來りて鉄炮と打櫛弓と射やとハ火箭と射

あどとて共城中更に取合と玄蕃ある日城門の前の
 柵際も馬駐居城中に返り忠の者有て今日午未の刻も二
 九も我等が勢と引入んと約束したる然とハ城の落ん
 と早二時三時とわつと竹股殿寺嶋殿の名譽の
 侍らう亂軍の内は討死あつとこともの惜く急ぎ此方
 へ御出あつと此間の義に主命あつと咎むる及むる
 本領以下相違あつと候と云いば城中も横田
 常陸前司老功との事と馴たる勇士いれバ佐久間殿の
 御心入つと存い我々降参の手土産も偶用意の
 五十目玉少々打残しては只今獻し可申ゆと云う早
 く筒先と揃へて打せうと佐久間もあつとて引退く又

前田又左衛門尉の佐々が恥を清めんと直江に向て戦ひと挑む
る。直江の前田が軍立ての佐々も入替り味方と木戸内へ誘引
入切りし引受て討て計もと察しけしへ手輕く人数と引上る
と佐々侍打てゆり無二無三の突合し。宇野半十郎中村幸衛
門倉木文大夫笠岡喜兵衛あつ云佐々が手と名あるもの共枕と
並つて討死し直江山城守の前田又左衛門尉が援兵の懸合とな
勝鬨と揚て引上り前田も強て追んとと相引まつと引たり
けし又上秋景勝旗本の丸田伊豆守甘糟備後守が加勢あり
長尾伊賀守大ふ力と得勝家と打捕らんと勇きたる勝家の敵
ふ荒手の加らりと見ると云共少も屈せぬ勇氣日頃十倍
左右に切拂ひ前後と突破る体猛虎の群羊を驅が如く又嵐

の落葉と掃めし似たり目覺しあんと愚あり乗る馬は越前
牧の白月毛雪あり猶白くけりけり尾髪紅よそあり如く
ありけり前田孫四郎柴田伊賀守勝家も勇めり今日と限りと
戦ふ上秋方と負色も見へけり景勝これ見とらるるあつめ
の共の振舞や生と越後死の越中とつて約束するものやとん
や忘し下りのひひと馬の上より立上り鞍を叩ひて下知を
しへ不識院謙信の年來練習と侍ともあり何ういふ少もさ
あひもせん真先より立並び鎗の穂先と突揃へ一足も引と勇め
合柴田遁と責らるる柴田が勢も踏止り爰と専途と
戦ひしと佐々敗軍の氣と奪られ引色も見えしへ上
秋方への勝とのさつと日既黄昏及びしへ兩大將引

分と相引つるを引たりけし直江も大将の本陣と氣遣へ手早
 く人数と引上銳氣と養ひ居りけり前田孫四郎は直江を追ん
 とてさうけり又左衛門尉うら制し不知案内の山路あり夜
 よりして道踏違へあゆしと禁めし孫四郎も實めと
 思ひ引つてそのちの陣互に陣門と堅め日々ふせり合と日頃
 越後國新發田の城主芝田因幡守治時馬の毛と染ること好む時白
 月毛の馬の尾髪追苗と染ける年と經て眞の紅月毛あり申り然
 る勝家の紅月毛の血をそりて治時の染し紅月毛と白自別
 ありて二人共柴田と云り終に混雜しく記さし書あり治時天平十
 三年戦死の後紅月毛は上牧家の井筒女之助取て乘し申り
 重修眞書太閤記七編卷之三拾終

嘉永五年壬子新刻

大坂

心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛
 同 博勞町 河内屋茂兵衛
 同 筋本町角 河内屋藤兵衛

日本橋通二丁目 須原屋茂兵衛
 同 二丁目 山城屋佐兵衛
 同 芝神明前 小田屋新兵衛

本石町十軒店 英岡田屋嘉七
 大傳馬町二丁目 丁子屋平兵衛
 横山町三丁目 和泉屋金右衛門
 浅草茅町二丁目 須原屋伊八
 筋違御門外猿籠町二丁目 紙屋徳八

江戸

